百人一首



平松礼二『ゴッホが写した江戸の梅(Ⅰ)』(一九九八)より

一　秋の田の　仮庵の庵の　苫を荒み　わが衣手は　露にぬれつつ

天智天皇

二　春過ぎて　夏来にけらし　白妙の　衣ほすてふ　天の香具山

持統天皇

三　あしひきの　山鳥の尾の　しだり尾の　長々し夜を　一人かも寝む

柿本人麻呂

四　田子の浦に　うち出でてみれば　白妙の　富士の高嶺に　雪は降りつつ

山部赤人

五　奥山に　紅葉踏みわけ　鳴く鹿の　声聞く時ぞ　秋は悲しき

猿丸大夫

六　かささぎの　渡せる橋に　置く霜の　白きを見れば　夜ぞ更けにける

大伴家持

七　天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも

阿倍仲麻呂

八　わが庵は　都のたつみ　しかぞすむ　世をうぢ山と　人は言ふなり

喜撰法師

九　花の色は　移りにけりな　いたづらに　我が身世にふる　ながめせし間に

小野小町

十　これやこの　行くも帰るも　別れては　知るも知らぬも　逢坂の関

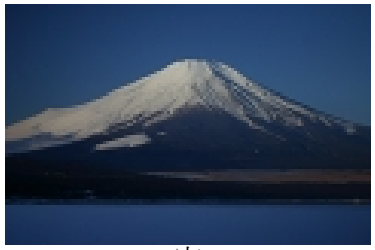
蝉丸



桜



紅葉



富士

十一　わたの原　八十島かけて　漕ぎ出でぬと　人には告げよ　海人の釣船

小野篁

十二　天つ風　雲の通ひ路　吹き閉ぢよ　乙女の姿　しばしとどめむ

僧正遍昭

十三　筑波嶺の　峰より落つる　みなの川　恋ぞつもりて　淵となりぬる

陽成院

十四　陸奥の　しのぶもぢずり　誰ゆゑに　乱れそめにし　我ならなくに

源融

十五　君がため　春の野に出でて　若菜つむ　わが衣手に　雪は降りつつ

光孝天皇

十六　立ち別れ　いなばの山の　峰に生ふる　まつとし聞かば　今帰り来む

在原行平

十七　ちはやぶる　神代も聞かず　竜田川　からくれなゐに　水くくるとは

在原業平

十八　住の江の　岸に寄る波　夜さへや　夢の通ひ路　人目避くらむ

藤原敏行

十九　難波潟　短き葦の　節の間も　逢はでこの世を　過ぐしてよとや

伊勢

二十　わびぬれば　今はた同じ　難波なる　みをつくしても　逢はむとぞ思ふ

元良親王

二十一　今来むと　言ひしばかりに　長月の　有明の月を　待ち出でつるかな

素性法師

二十二　吹くからに　秋の草木の　しをるれば　むべ山風を　嵐　といふらむ

文屋康秀



砂浜



月



西陣

二十三　月見れば　千々に物こそ　悲しけれ　我が身一つの　秋にはあらねど

大江千里

二十四　このたびは　幣もとりあへず　手向山　紅葉の錦　神のまにまに

菅原道真

二十五　名にし負はば　逢坂山の　さねかづら　人に知られで　くるよしもがな
藤原定方

二十六　小倉山　峰のもみぢ葉　心あらば　今ひとたびの　みゆき待たなむ
藤原忠平

二十七　みかの原　わきて流るる　泉川　いつ見きとてか　恋しかるらむ
藤原兼輔

二十八　山里は　冬ぞ寂しさ　まさりける　人目も草も　かれぬと思へば
源宗于

二十九　心あてに　折らばや折らむ　初霜の　置き惑はせる　白菊の花
凡河内躬恒

三十　有明の　つれなく見えし　別れより　暁ばかり　憂きものはなし
壬生忠岑


菊


西陣


梅

三十一　朝ぼらけ　有明の月と　見るまでに　吉野の里に　降れる白雪
坂上是則

三十二　山川に　風のかけたる　しがらみは　流れもあへぬ　紅葉なりけり
春道列樹

三十三　久方の　光のどけき　春の日に　静心なく　花の散るらむ
紀友則

三十四　誰をかも　知る人にせむ　高砂の　松も昔の　友ならなくに
藤原興風

三十五　人はいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞ昔の　香に匂ひける
紀貫之

三十六　夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを　雲のいづこに　月宿るらむ
清原深養父

三十七　白露に　風の吹きしく　秋の野は　貫きとめぬ　玉ぞ散りける
文屋朝康

三十八　忘らるる　身をば思はず　誓ひてし　人の命の　惜しくもあるかな
右近

三十九　浅茅生の　小野の篠原　忍ぶれど　余りてなどか　人の恋しき
源等

四十　忍ぶれど　色に出でにけり　わが恋は　物や思ふと　人の問ふまで
平兼盛

四十一　恋すてふ　我が名はまだき　立ちにけり　人知れずこそ　思ひ初めしか
壬生忠見

四十二　契りきな　かたみに袖を　しぼりつつ　末の松山　波越さじとは
清原元輔

四十三　逢ひ見ての　のちの心に　比ぶれば　昔は物を　思はざりけり
藤原敦忠

四十四　逢ふことの　絶えてし無くは　なかなかに　人をも身をも　恨みざらまし
藤原朝忠

四十五　あはれとも　言ふべき人は　思ほえで　身のいたづらに　なりぬべきかな
藤原伊尹

四十六　由良の門を　渡る舟人　梶を絶え　行方も知らぬ　恋の道かな
曾禰良忠

四十七　八重葎　茂れる宿の　寂しきに　人こそ見えね　秋は来にけり
恵慶法師

四十八　風をいたみ　岩打つ波の　おのれのみ　砕けて物を　思ふ頃かな
源重之


篝火


波


携帯

四十九　みかきもり　衛士のたく火の　夜は燃え　昼は消えつつ　物をこそ思へ
大中臣能宣

五十　君がため　惜しからざりし　命さへ　長くもがなと　思ひけるかな
藤原義孝

五十一　かくとだに　えやはいぶきの　さしも草　さしも知らじな　燃ゆる思ひを
藤原実方

五十二　明けぬれば　暮るるものとは　知りながら　なほ恨めしき　朝ぼらけかな
藤原道信

五十三　嘆きつつ　一人寝る夜の　明くる間は　いかに久しき　ものとかは知る
藤原道綱母

五十四　忘れじの　行く末までは　難ければ　今日を限りの　命ともがな

儀同三司母

五十五　滝の音は　絶えて久しく　なりぬれど　名こそ流れて　なほ聞こえけれ

藤原公任

五十六　あらざらむ　この世のほかの　思ひ出に　今ひとたびの　逢ふこともがな

和泉式部

五十七　めぐり逢ひて　見しやそれとも　わかぬ間に　雲隠れにし　夜半の月かな

紫式部

五十八　有馬山　猪名の笹原　風吹けば　いでそよ人を　忘れやはする

大弐三位

五十九　やすらはで　寝なましものを　小夜更けて　傾くまでの　月を見しかな

赤染衛門

六十　大江山　いく野の道の　遠ければ　まだふみもみず　天の橋立

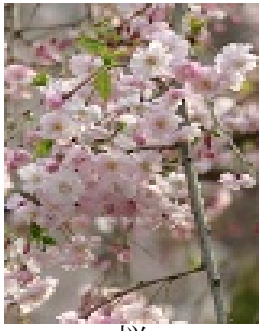
小式部内侍



時計



滝



桜

六十一　いにしへの　奈良の都の　八重桜　けふ九重に　匂ひぬるかな

伊勢大輔

六十二　夜をこめて　鳥の空音は　はかるとも　よに逢坂の　関は許さじ

清少納言

六十三　今はただ　思ひ絶えなむ　とばかりを　人づてならで　言ふよしもがな
藤原道雅

六十四　朝ぼらけ　宇治の川霧　たえだえに　あらはれわたる　瀬々の網代木
藤原定頼

六十五　恨みわび　ほさぬ袖だに　あるものを　恋に朽ちなむ　名こそ惜しけれ
相模

六十六　もろともに　あはれと思へ　山桜　花よりほかに　知る人もなし
大僧正行尊

六十七　春の夜の　夢ばかりなる　手枕に　かひなく立たむ　名こそ惜しけれ
周防内侍

六十八　心にも　あらでうき世に　長らへば　恋しかるべき　夜半の月かな
三条院

六十九　嵐吹く　三室の山の　もみぢ葉は　竜田の川の　錦なりけり
能因法師

七十　寂しさに　宿を立ち出でて　眺むれば　いづこも同じ　秋の夕暮れ
良暹法師

七十一　夕されば　門田の稲葉　おとづれて　葦のまろやに　秋風ぞ吹く
源経信

七十二　音に聞く　高師の浜の　あだ波は　かけじや袖の　濡れもこそすれ
紀伊

七十三　高砂の　尾上の桜　咲きにけり　外山の霞　立たずもあらなむ
大江匡房

七十四　憂かりける　人を初瀬の　山おろしよ　激しかれとは　祈らぬものを
源俊頼


露


岬


桜

七十五　契りおきし　させもが露を　命にて　あはれ今年の　秋も往ぬめり
藤原基俊

七十六　わたの原　漕ぎ出でて見れば　久方の　雲居にまがふ　沖つ白波
藤原忠通

七十七　瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の　われても末に　あはむとぞ思ふ
崇徳院

七十八　淡路島　通ふ千鳥の　鳴く声に　幾夜寝覚めぬ　須磨の関守
源兼昌

七十九　秋風に　たなびく雲の　絶え間より　もれ出づる月の　影のさやけさ
藤原顕輔

八十　長からむ　心も知らず　黒髪の　乱れて今朝は　物をこそ思へ
待賢門院堀河

八十一　ほととぎす　鳴きつる方を　眺むれば　ただ有明の　月ぞ残れる
藤原実定

八十二　思ひわび　さても命は　あるものを　憂きに堪へぬは　涙なりけり
道因法師

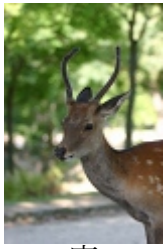
八十三　世の中よ　道こそなけれ　思ひ入る　山の奥にも　鹿ぞ鳴くなる
藤原俊成

八十四　長らへば　またこの頃や　しのばれむ　憂しと見し世ぞ　今は恋しき
藤原清輔

八十五　夜もすがら　もの思ふ頃は　明けやらで　閨のひまさへ　つれなかりけり
俊恵法師

八十六　嘆けとて　月やは物を　思はする　かこち顔なる　我が涙かな
西行法師

八十七　村雨の　露もまだ干ぬ　真木の葉に　霧立ちのぼる　秋の夕暮れ
寂蓮法師


鹿


小石


月

八十八　難波江の　葦のかりねの　ひとよゆゑ　みをつくしてや　恋ひわたるべき
皇嘉門院別当

八十九　玉の緒よ　絶えなば絶えね　長らへば　忍ぶることの　弱りもぞする
式子内親王

九十　見せばなや　雄島のあまの　袖だにも　濡れにぞ濡れし　色は変はらず
殷富門院大輔

九十一　きりぎりす　鳴くや霜夜の　さむしろに　衣片敷き　一人かも寝む
藤原良経

九十二　わが袖は　潮干に見えぬ　沖の石の　人こそ知らね　かわく間もなし
二条院讃岐

九十三　世の中は　常にもがもな　渚こぐ　あまの小舟の　綱手かなしも
源実朝

九十四　み吉野の　山の秋風　小夜更けて　ふるさと寒く　衣打つなり
藤原雅経

九十五　おほけなく　うき世の民に　おほふかな　我が立つ杣に　墨染の袖
大僧正慈円

九十六　花誘ふ　嵐の庭の　雪ならで　ふりゆくものは　我が身なりけり
藤原公経

九十七　来ぬ人を　まつほの浦の　夕凪に　焼くや藻塩の　身もこがれつつ
藤原定家

九十八　風そよぐ　ならの小川の　夕暮れは　禊ぞ夏の　しるしなりける
藤原家隆

九十九　人も惜し　人も恨めし　あぢきなく　世を思ふゆゑに　物思ふ身は
後鳥羽院

百　百敷きや　古き軒端の　しのぶにも　なほあまりある　昔なりけり
順徳院



旅券


桜


海鳥